――在学中から様々なコンペティションへ出品していますね。2015、16年には2回続けて「1_WALL」（※1）のファイナリストに選出されました。
作家になりたいからコンペに出すというよりは、作品を見てもらいたいから出していました。「1_WALL」についても写真を使っている作品だから出せるだろうと思って応募しました。ただ、審査内容はあんまり響いてなかったかもしれません。「あ、そっか、なるほどな」みたいな。審査の方式が、作家が喋って、審査員が喋ってじゃないですか。もう一回話せればな、と思っていた。後出しジャンケンじゃん、みたいに感じました。でもそれは自分の作品のクオリティのこともあるし、なんとも言えない。審査結果には全然文句なくて、自分がやり切れてなかったんだろうな、どっかで合わせちゃったんだろうなって悔しさがあったんだろうなと思います。もっと自分が持ち味を出し切れば、さらにいい作品にできただろうなって。しっかり考えてやったので、後悔はないです。「1_WALL」は100点を出す場所でなくて、失敗というか、出し切ってみて反応をみるという場だったなと。

――ご自身の制作の中で転機だと思う作品や出来事はありますか。
武蔵野美術大学の油絵科を卒業した後、東京藝術大学の大学院に進んで、上野公園の炊き出しを見かけるようになりました。たくさんの人が集まっていて、物資を積んだ台車とかもズラーッと並んでいて。毎週見ていると台車と持ち主が一致してくる。たまたま蔵前の方に遊びに行ったとき、見知った台車が放置されていて、これは黒いキャップのおじさんのやつだとわかりました。台車には警察の書置きが貼られていて、「何月何日までに撤去しないと捨てますよ」と書いてあり、なんで大切なものを放置しているんだろう、とよく見たら台車の脚が一本折れていました。高齢の方だったので動かせなくなったんだろうと思い、その場でレンタカーを借りて、アトリエに全部運び込んで台車を作り直して、置き手紙と一緒におじさんに返そうといつもの炊き出しの場所へ運びました。
その一連の流れをインスタレーションにまとめたのが「夢をみない夜」（2013）です。レンタカーを運転しながら、「なんで話したこともないおじさんのために一万数千円も払って、でかいバン借りて運転してるんだろう」と思いつつ、作品を作ることで自分の人生が動かされているという爽快さと、作品ってこうしてできていくんだろう、と確信みたいなのを感じて、すごく嬉しくなりました。制作を通して、見るはずもなかったものを見、感じるはずもなかったものを感じることができる。何かと関わりながら作っていくことの楽しさを知り、作品って自分の人生を動かしてくれるものであってほしいという実感を持った出来事です。

――その後も人や場所との関係性を起点に制作を続けていらっしゃいますね。最近では無機物にアテレコする映像など、映像作品も制作されています。
アテレコを最初にしたのは熱海のレジデンスで作った「石のいし」（2021）です。伊豆半島って砂浜じゃなく、石がたくさん転がってるんですね。日が沈んだ後に、高波で動いた石が一斉にがらがらがらってきれいな音を出すんですよ。この音は人間が生まれる前からずっとここで鳴っていたんだなと思いました。ビーチが坂道になっていて試しにいろんな石を転がしたら、みんな違う転がり方をする。石が転がっている様子に石の意志みたいなものを感じて、面白いなと思って。石が転がる映像だけでも良かったかもしれないけど、石の気持ちになるために僕が「ゴロゴロ」と声を当ててみたら、自分で見ても笑える作品になり、今までそんな作品なかったなあ、これは面白いかもと思い、そこからアテレコの作品をつくり始めました。その後の風に飛ばされるレシートを使った作品「ゆくすえ」（2022）ではもっと意味のある言葉を話すようになったり、期限切れのクーポン券には「明日があるさ」を歌わせたりしました。

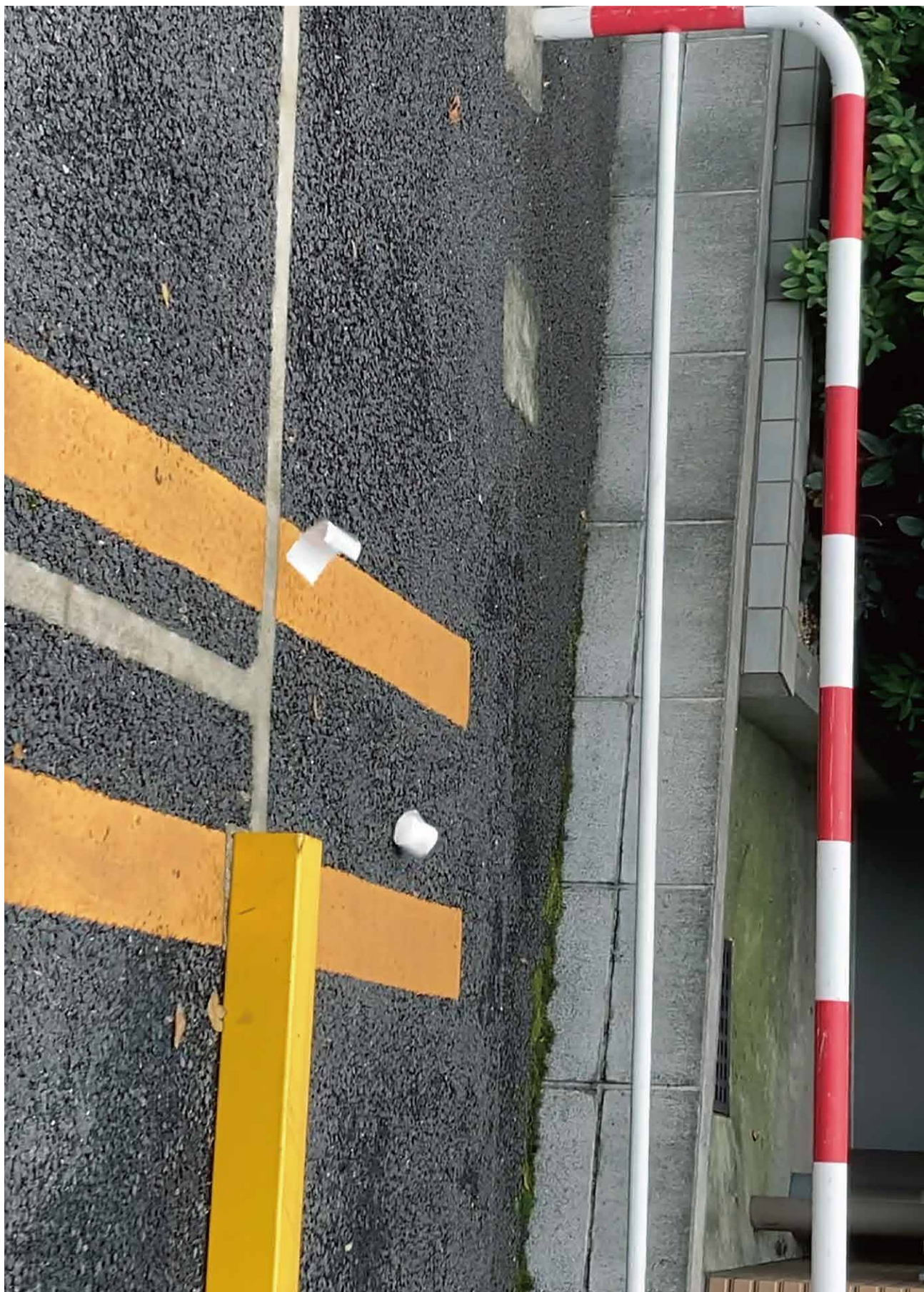
――今後の作品制作について、光岡さんが大切にしていきたい感覚はなんですか。
この1年半くらい、制作をしていて「この奥にもっと何かあるな」という予感があって、それに触れたいなと思っています。わかりやすい言葉で今の状態を説明することはできるかもしれないけど、わからないまま進んで行った先にもうちょっと面白いものがある気がする、もう一本の脇道がありそうな気がするんですよね。石が転がっていて面白い、でもそれって石が転がってるだけじゃないですか。どう説明してもただ石が転がっているだけなんですけど、でもその状況をそのまま見せることで、もっと深いところにいけるんじゃないかなと思っていて。その奥にあるものに触れたい、というのが今の一番の欲求です。だからと言ってひとつにずっと向き合うというよりは、いろんな方向に興味が向いて、そのうちに遠いもの同士がつながって一気に開けるような気がしています。
僕は言葉で全部説明しようとすると上手くいかなくて、何か「面白いのありました!」というのがベースにあって、その面白さを熱弁することで作品ができている。小学生の時に拾った石を割ってみたら中身が綺麗だったから誰かに見せたい、という気持ちからずっと変わっていない気がします。

※1：ガーディアン・ガーデン主催の若い才能を発掘することを目的としたコンペティション。「グラフィック」と「写真」の2つの部門で、2009年から2022年まで開催。

（インタビュー収録：2022年11月25日）

光岡幸一　**Koichi Mitsuoka**
名前は、字がすべて左右対称になる様にと祖父がつけてくれて、読みは母が考えてくれた。（ゆきかずになる可能性もあった）。宇多田ヒカルのPVを作りたいという、ただその一心で美大を目指し、唯一受かった建築科に入学し、いろいろあって今は美術家を名乗っている。矢野顕子が歌うみたいに、ランジャタイが漫才をするみたいに、自分も何かをつくっていきたい。一番最初に縄文土器をつくった人はどんな人だったんだろうか?
主な個展に2019年「あっちとこっち」（外苑前 FL田SH ／企画 FL田SH）、2021年「もしもといつも」（原宿 block house ／企画 吉田山）。2021年写真新世紀優秀賞（横田大輔 選）、広島市現代美術館企画「どこXデザ」蔵屋美香賞受賞。

デザイン：牧寿次郎
編集・発行元：株式会社リクルートホールディングス　リクルートクリエイティブセンター
ガーディアン・ガーデン
〒104−8227
東京都中央区銀座7−3−5
ヒューリック銀座7丁目ビルB1F
http://rcc.recruit.co.jp



光岡幸一（2022）

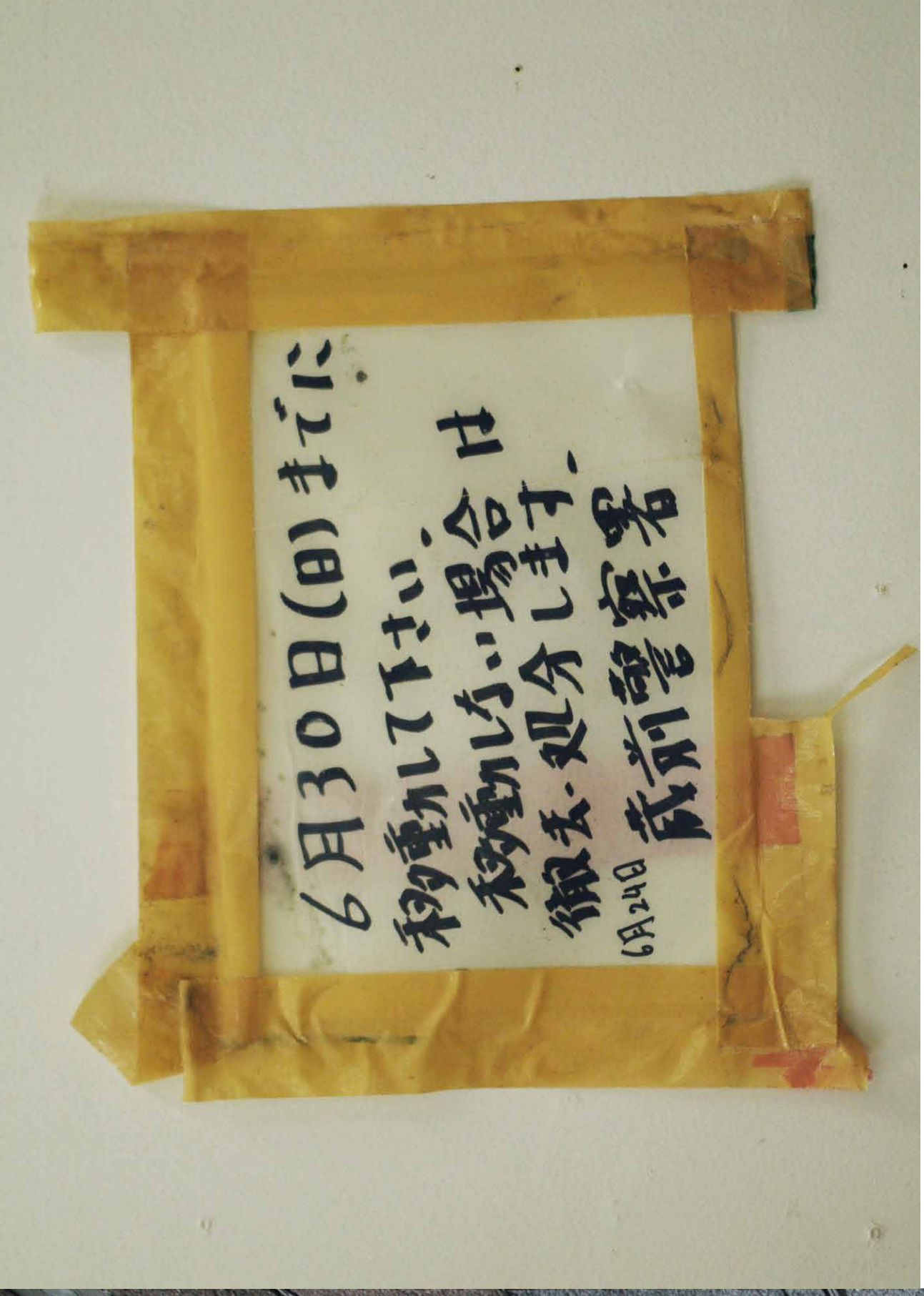
――まず、光岡さんの幼少期についてお聞かせください。
適度に外で遊ぶし適度に中で遊ぶ、平凡なチビでした。他の人がやっていなかったことといえば、小学校の下校時に石を拾ってきて、ハンマーで割って中を見ることに一時期ハマっていました。黒いガラなのに割ってみると赤かったりとか白かったり。中身が気になる石を毎日一個拾っていました。登下校の20分ってチビもには長いので、何か楽しみを見つけようとしていたんでしょうね。
美大進学を意識し始めたのは中学3年生の春休みです。当時ガラケーで着うたとか待ち受けを漁っていて、そのサイトで多田ヒカルの「travelling」のプロモーションビデオをたまたま見つけ、自分もこれを作る人になろうと思いました。小さい画面の映像を一日何十回も見て、宇多田ヒカルと仕事をしたいって思い、とりあえず美大に行って映像を作れば会えるんじゃないかなと、武蔵野美術大学の空間演出学科を受けました。併願で建築学科も受けたら、建築学科しか受かんなくて。でも、とにかく進んでいる時間がもったいない、一日も早く宇多田ヒカルに会わなくちゃと思っていたから建築科へ入学しました。入学してから映像学科があることに気がつきました。

――PVが美術への入り口だったのですね。武蔵野美術大学建築学科へ入られた後、3年時に油絵科へ転科されています。これはどのような理由でしたか?
建築学科の2年生前期の課題で6世帯分の集合住宅を作る課題がありました。そこで僕が出したのは、路上生活者の方々を誘致して生活をしてもらうというものでした。東京に来て、初めに気になったのが路上生活の方が普通に新宿とかで寝ていることでした。豊田の田舎では見たことなくて、凄くびっくりしたんですけど、あんな見えない、透明人間みたいに扱っているのが凄く不思議だなあと。
そこから新宿西口公園の炊き出し を手伝ったりしました。ボランティアでもなく、なんか気になる。外的環境から身をやつることを建築の原点としたとき、あの人たちの作っている家って原点的なものなのかもしれないと考えました。人が住みたいと思う気持ちが結晶化したみたいな、すごいピュアな建築みたいに見えて。そういう思いで課題を持っていったんです。
すると、その担当教員の先生に「君がやっていることは建築じゃなくてアートだね」と言われて。じゃあ建築とアートって何が違うんだろう。建築って言葉を突き詰めて考えた結果、そうなっただけだったので、アートとかわかんないどうしよう。このまま だと建築学科でやっていても馴染めなさそうな気がする。でも生半可な気持ちで油絵科に行くのは違う、何か1つ作品を作ってから決めよう、そう思い、東京の下宿先から愛知の実家まで歩いて帰ることにしました。
それが「その間にあるもの」（2010）です。コンビニで紙の地図を買って、地図の端まで歩いたらまたコンビニで次の地図を買って歩く、ということを繰り返し2週間くらいかかりのました。ずっと知らない道を歩いているんですけど、地元に帰る道なのであるー歩を境に自分の地元に踏み入れるー歩があるんですよ。2日目くらいからもう全身ちぎれるくらいの筋肉痛になるんですけど、ハハハになりながら一歩踏み出したら「あ、ここ知ってるわ」と思った瞬間があった。それまで歩いてきた道がぱーっと走馬灯みたいに駆け巡って、「東京と愛知って地続きに繋がってるんだ!」と、当たり前のことでも少し見方とか関わり方が変わるだけで感じ方が全然違う。これってなんかアートっぽいと思って。その実感から自分の作品を作るということが始まったと気がします。

静岡 100Km
Shizuoka
1
沼津 45Km
Numazu
箱根 11Km
Hakone
国道
1
ROUTE
酒匂歩道

夢をみない夜（**2013**）

とにかく気になってしょうがなかった。
公園の炊き出しを待つ数百人の列。崩れかけた手作りの家。袋いっぱいに入った缶の山のギラつき。生きるために缶を拾うという行為のストレートさ。実際にはもちろんそんな単純ではない。肯定したいのとも違う。そんな事できる立場じゃない。あそこにいるのは「ホームレス達」ではなく外で生きるおじさんの人生が一人ずつあるだけだ。でも、なんとか、どうにかして、触れたい。
そんなときに出会った台車だった。
毎週炊き出しにきているあのおじさんのものだとすぐに分かった。
もちろんおじさんは僕の事は知らない。
これはただのおせっかいだ。
この作品は、警察に撤去されそうになっていたおじさんの壊れた台車をレンタカーで運び出し新しい台車につくりなおして持ち主に返そうとした、という自己の体験を元にしたものだ。
上野公園では毎週、路上生活者の方々へ炊き出しが行われており、そこが通学路という事もあり、いつも気になって通りかかる時に遠くからに見ていた。（かと言って話かけたりは全然できないのだが。）
炊き出し会場には大勢のおじさん達が集まり、近くには生活物資を積んだ台車が何台か停められていた。
そして何ヶ月もすると、台車と持ち主のおじさんがだんだん一致してくるのだ。
そんなある日、関係ない場所でたまたまその台車が停められているのを見つけた。直ぐにあの黒い帽子のおじさんの物だと分かった。警察の書置きの期限からはもう何日も過ぎていた。よく見ると台車の脚が一本折れて、動かせなくなっていた。どうにもできなくなって泣く泣くそこに置いていったおじさんの姿が勝手に頭に浮かんだ。

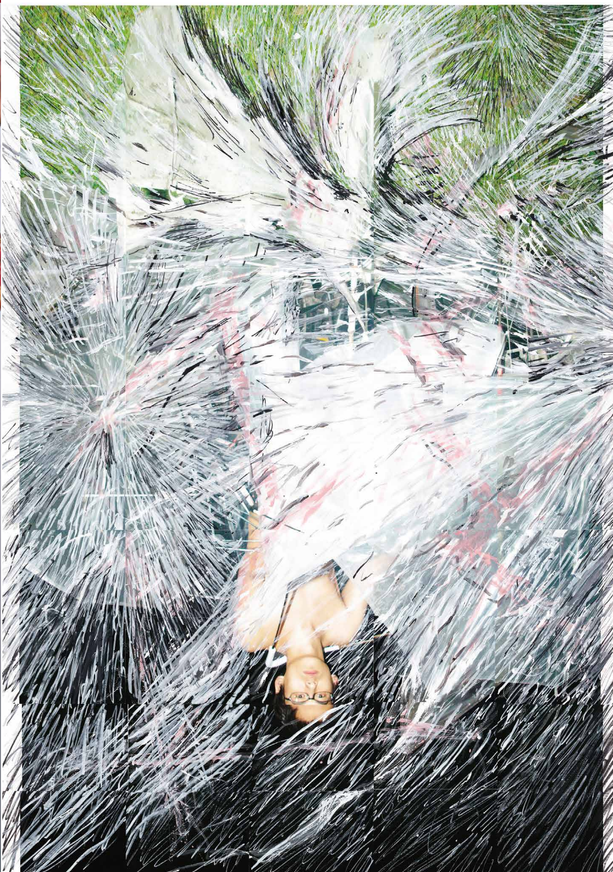


台車なおしておきました。
よかったら使ってください。

2013年 7月 10日。

たしかなものたちへ（**2016**）

宇多田ヒカルの**PV**が作りたいという一心で美大を目指し、ムサビの建築科に入学した（そこしか受からなかった**!**）そしていろいろあって**2**年生の時、東京の下宿先から愛知の実家まで徒歩で帰ったのをきっかけに油絵学科に転科して、そこからずっとパフォーマンス作品の様なものを作っていた。頭ではなく体が直に何かを実感する体験は、自分にとって一番確かなものだった。
大学院にいって写真を始めたのだが、これが全然上手くいかなかった。
たったシャッターボタン一つを押すだけで写真はいとも簡単に何もかもツルっと写し出してしまったのだ**!**
現れたイメージは自分の体からポーーーーーーーーーーン**!**と抜け飛び去り、いつも自分は置いてかれてしまっている様な感覚だった。
自分が何を撮っているのか、そこに何が写し出されているのか、いつも分からなかった。
そこで、撮った写真を絵に起こすという事を始めた。
手を動かせばその様にそこに線が残るという単純で力強い確かさは、写真には無い実感を強く得ることができた。
自分にとって描く事は、写真に置いてかれていた体を動かし、追いつこうとする行為だった。そうやっていつも写真と絵は同時に存在していた。そしてついに写真の上に描きだした。写真を追い越したかったのかもしれない。
いつのまにか写真がちょっと好きになっていた。写真がいろんなところに連れて行ってくれたし、沢山の出会いをもたらしてくれた。今ではポーーーーーーーーーン**!**とイメージが抜け飛ぶのも楽しんでいる。むしろそこがお前のイイとこだよ**!!!**サンキュー写真**!!**イエーーーーーーイ**!!!**◎
2016.1.21



出口はつくれる。（**2018**）

奈良県立大学で学生たちと一緒に作ったもの。
学内で行われる展覧会に、ゲストで呼んでもらい、奈良にやって来た。なんと校内を自由に使っていいとの事だった。
そこで僕らは、ニッパーでフェンスを切り、草を刈って階段を作り、ドアを付けて、実際に使えるもうひとつの出口をつくった。
なにかを途中でやめるのにとても勇気がいる世の中だけど、出口や道はいつでも自分で作ることができる。
（そしてなんとこの出口は今でも残してくれているらしい**!**）

出口はつくれる

置自転車場
駐

家だと思っていた二畳ほどの建物は、釣り人や散歩中の人が休憩できる様にと建てた休憩小屋で、中には椅子や棚が置いてあった。
よく見ると川に降りていく階段も造られている。廃材でつくったベンチもみんなが休める様にと作ったもので、雑草も毎朝手入れしているというのだ。しかもそれを**8**年も続けているらしい。「なんでこういうことを始めたんですか**?**」と聞くと、「これが遊びっていうもんなんだよ**!** やっぱ遊びがないとな**!**」と言われ、なんだかすごい人だなと思った。
このおじさんは、公共に手を加えてわざわざ公共を造っているのだ。そんな話をしているうちに、この庭の事を知っている別のおじいさんが本当に休憩しに来た。当然僕もその庭が好きになった。小屋には小さな窓があり、その窓から川を眺めるのが良い感じなのだ。
隣の家の人もこんな気持ちで川を眺めているのかもしれない。ある日おじさんから、「あんた美大行ってたんなら小屋に絵の一つでも飾ってくれよ**!**」と言われ、それいいな**!**と思い、この庭で展覧会のような事をしてみようと思った。「ひみつの庭」と題したこの企画は、過去４回開催された。住所は非公開、定員５名の予約制で、ツアーを含めた各回**1**日限りの催しだ。
草の中の道や、猫小屋のあった場所など、誰も知らない場所を巡り、ここでしか見られない物を見ておじさんの庭にたどり着く。
そこで絵やパフォーマンスを見たり、お茶したりしてひみつの庭を楽しんだ。

2018年**9**月**23**日（第**1**回）
画家　中島あかね
2018年**11**月**24**日（第**2**回）
アーティスト　うらあやか
2019年**6**月**8**日（第**3**回）
画家　小野田藍
2019年**9**月**21**日（第**4**回）
美術家　花崎ゆり

2019年**10**月
令和元年東日本台風により消失。
もうずっとこの川沿いに住んでいるおじさんが「東京オリンピックまでにはここも住めなくなっちゃうかもなぁ。」と言っていた。
その数ヶ月後、そのおじさんは家を残してどこかへ行ってしまった。河川敷には空き家のまま放置されている家が実は沢山あるという事を知った。野良猫の去勢活動が拡がったことで、使われなくなった猫小屋も増えていった。ちょうどその頃、上野や渋谷からホームレスの家がどんどん消えていった。

2019年
久しぶりに河川敷に行くと、国土交通省の張り紙が至る所に貼られていた。張り紙には多摩川の拡幅工事が予告されており、それはこれまで通ってきた場所が丸々無くなる事を意味していた。猫村も、ひみつの庭も、草の中の手作りの道も、もうすぐ水に消えてしまう。
ここが無くなってしまう前に何か、どうにか関われないかと考えた。そこで、今では草がボーボーの廃墟になった猫小屋の村があった場所を手作業できれいに整え、**TAMA ART CENTER**という私設のアートセンターをつくった。河川敷の住人達や、ひみつの庭をつくったおじさんの手仕事を見習い、遊びの心を大事に、その場にある草木や崩れた家の破片を拾い集め、ひみつの庭と同様、公共の場としてそこを造った。

2019年**9**月

東京の渋谷区にあるギャラリー **FL**田**SH**で開催した個展「あっちとこっち」では、東京の端っこにある**TAMA ART CENTER**と、東京の中心にある**FL**田**SH**の、あっち側とこっち側をつなぐ**2**館同時開催の展覧会を行った。

2020年
多摩川は**2019**年**10**月の令和元年東日本台風でぐちゃぐちゃになってしまったが、年が明ける頃には新芽が出るように真新しいブルーシートの家が建ち始めた。そして遂に川の拡幅工事が始まった。ヨシは刈り取られ、何台もの重機がやってきた。
おじさん達は自分で作ってきた家を自分で解体し、少しずつ引越しをしていた。「どこに行くんですか**?**」と聞いたら「まぁどっか工事の被らんとこまでだなー」と、別に何でもない事の様に言っていたのがすごく印象的だった。別にここがダメならどっかに動けばいいのだ。そこで**TAMA ART CENTER**も引越しをすることにした。単管をバラし、工事の被らない所まで手作業で何十往復も運ぶ。
引越しはかなりの重労働で、何日もかかった。おじさん達もきっと大変だったろう。去年までは背の高いヨシが目隠しになっていたので、日中も作業ができたのだが、今はその草が刈り取られて無くなったせいで目につく様になってしまい、日が沈んでから多摩川に通う様になった。夜の河川敷も静かで綺麗だと知る。新しい**TAMA ART CENTER**は大きな木の根本に建てた。単管でガチガチにするのではなく、その辺に放置された家の残骸や、雨や台風で流されてきた校や竹を組んで壁を作った。その壁は、中心の木に緩やかにもたれかかり、木は柱の役割りをしている。大雨や台風で定期的に崩れるが、そこに流されて来たものでまた場所を造る。そして何かあれば直ぐにどこにでも移動可能な柔らかな建物。そこでの在り方。

2020〜**2022**年
定期的にツアーを開催。

2022年**11**月現在。
コロナでストップしていた工事が急に始まった。恐らく来年の今頃にはここも水に沈んでいるだろう。この木も切り倒されてしまう。
近々引越し先を見つけに行こうと思う。

TAMA ART CENTER（2019）

2015年
引っ越して来た家の近くには、大きな川が流れている。
河川敷には、野球場やテニスコートがあって、散歩をする人やパンを食べる若者たちが沢山いる。そしてそのすぐ側の川沿いには日ヨシという背の高いイネ科の植物が生い茂り、その草に隠れる様にホームレスのおじさん達の家がひっそり建ちならんでいる。
僕はその草むらの奥で、小さな材を見つけた。

何度か川に散歩に行く内に仲良くなったホームレスのおじさん方、迎を送ってくれた。
そこは藁ぶかやらゴミが入れている事もあり、建ち並ぶ手作りの家たちは沒落や廃墟感的なものではなく、それもまた手が込んでいて見れば目も大きくきらきらしていて、家に入れかそのまま出ていく藁をおもしろかった。（図がにツアーをしてくれたひとは藁って人は藁って食べ物を地面に敷き詰めてその上でたき火をするという感じで暮らしていた。雨の日はどうしているのだろうか。）
その草の中を多摩川に通ってきた。夜の河川敷も静かで綺麗だと知る。新しい**TAMA ART CENTER**は大きな木の根本に建てた。単管でガチガチにするのではなく、その辺に放置された家の残骸や、雨や台風で流されてきた校や竹を組んで壁を作った。その壁は、中心の木に緩やかにもたれかかり、木は柱の役割りをしている。大雨や台風で定期的に崩れるが、そこに流されて来たものでまた場所を造る。そして何かあれば直ぐにどこにでも移動可能な柔らかな建物。そこでの在り方。

草の中に入っていく手作りの道はいくつもあった。ある日新しく見つけた道の奥で廃材小屋が発見された。
建物は単管と木材で造られ、屋根の部分は全て鋼に緑色の塗料で塗られており、古ちびでちょぼちょぼしっかりした造りだった。
ここで見つけた廃材は既に誰も住んでおらず、からっぽだったのだが。この付近はホームレスの人が建てた家ではなく、近所に住む変わり者のおじいさんが、河川敷にいる数十匹の野良猫を捕まえる為に気晴らしに建てた猫小屋の集まりなのだと、この間ツアーしてくれたおじさんが教えてくれた。そういえばこの辺りには、緑色に塗られた大小の猫小屋が何軒も建てられている。それもこのおじいさんが勝手に造ったのだったのだ。そしてみ間に後日そこを訪れた時には、建物の大半は行方知れとして取り壊されて小屋中で、僅かな単管の骨組みと、猫たちの寝場所だけが残っていた。粗い縄状の石や、レンガの靈祠でご丁寧に手作りの靈地はいつもとてもきれいに手入れされていて、そこでノラ猫が延命祭を行っている。昨日は見えない神さまの向こう側でお祭りや音楽が聞こえていた。僕はその場所が好きになり、たまに行く癖になった。

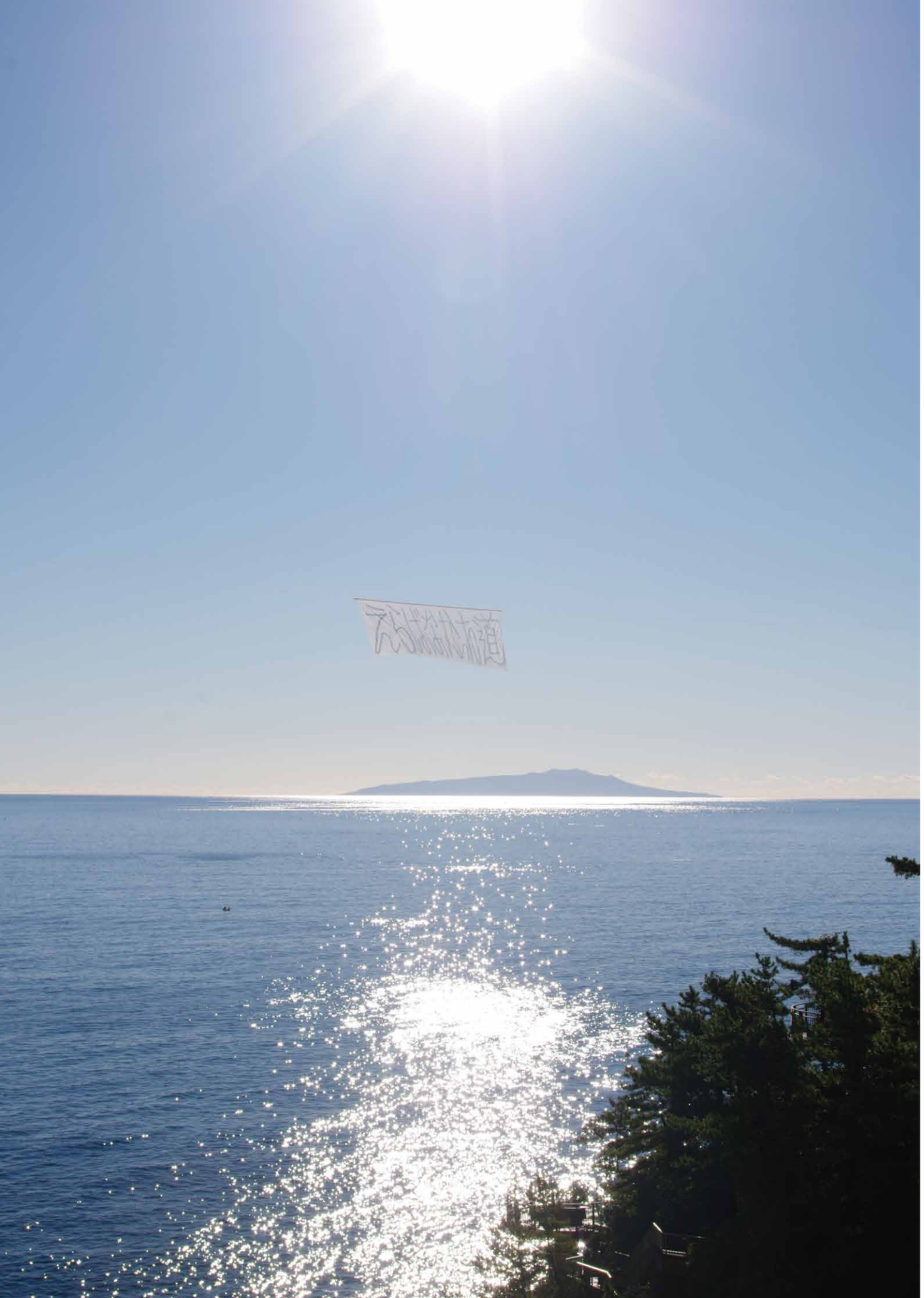
2017年
川沿いにはずらっとテントの家が建ち並んでいるのだが、その並びでひとつ、いつも気になる家があった。
何年も、この河川敷に通っているとたんだんとその資産や経歴あたいなどを町で噂める様になってくるのだが、その猫は他の家とは少し感じが違うのだ。敷地には二重はどのフルーシートの家があり、側に建築中ったと思へ、簡単もいつも几帳面に手入れされている。いつもよりも廉れたところがなかっていないだけだったのだが、ある日そこのベンチに見知らぬおじさんが腰掛けていた。
顔面に険悪な表情が、なんだかこの家は違うぞ、なんとなくこの家ではなく、庭だったのだ。そこはホームレスの方が作った廃所でなく、近所に住むちょっと変わったおじさん達、皆んなが集えるようにと造った居心地の庭だった。

ENTER

TAMA ART CENTER

もしもといつも（**2021**）

もしもといつも、日常と非日常、今と昔、あっちとこっち、進歩と減退、地上と地下、写真と絵画。
遠くにありそうで、実際はものすごく身近にあって（しかも沢山**!**）あっという間にひっくり返ったかと思えば、気づいたら一緒になっていたりする。もしもといつものあいだにある景色。
2021年の年明けごろ、知り合いの展示を見に行った時、そこのギャラリーは感染対策の為にドアを開け放っていた。
今までは外部を遮断してきた空間に、邪魔者とされてきた冬の冷たい風が吹き込み、確かに肌寒さを感じながらの鑑賞だったのだけど、出会うはずのないものが出会ってしまった様なその状況に微かな美しさも感じられたのだ。そこに何かがある**!**と思った。
ちょうど同じ頃、その筋に詳しい人にずっと前から一度行ってみたかった渋谷の暗渠を案内してもらった。上手く言えないが、そこに何かヒントの様なものがある！と直感したのだ。
暗渠とは何十年も昔に元々は地上を流れていた川が都市開発の流れを受けて地下へと移されたもので、渋谷の地下には今もその川が流れ続けているのだ。
日が沈んだ後、長靴に履き替えて人目を避けて柵を乗り越え、こっそり忍び込んだ。
中は真冬とは思えないぐらい暖かく、真っ暗な巨大なトンネルの中で大きな水音がごおごおと響き、そこをライトで照らしながら慎重に行く。まるで巨大な生き物の血管の中を歩いている様だった。普段生活するコンクリートの薄皮のすぐ真下に、全く見たことのない景色が広がっている。
日常と非日常とがそのまま地上と地下で分かれていて、それは今と昔の話でもあり、都市の取捨選択の歴史でもある。そこを自分の足で行き来する実感がこの作品の根っこになっている。ちょうどその頃は、東京でコロナが爆発的に流行してから半年ちょっとが経ち、それに慣れ始めつつもどこか落ち着けないユラユラとした時期だった。
そんなもしもといつものあいだにいる時にだけ見える何かがあるのだ（きっと。）
展示会場になった**block house**というギャラリーは、渋谷区の地下にあり、その床下には排水槽が**3**つあり、常に流れ込む地下水を常時ポンプで下水へと流していた。
このポンプが止まるとここはすぐに水没してしまうらしい。
フタをあげてみると、槽には赤茶色の水と泥が溜まっていた。
その昔、地上を流れていた渋谷川の水は、関東ローム層の鉄分によって赤茶色に染まっていたらしく、昔の人はそれを見て渋色と呼んだらしい。今でも地下に流れるその自然の湧水は本当に赤茶色をしていて、大都会にあるものとは思えない程、想像以上に野生的な色をしていた。昔はこの土が至る所に露出していたのだ。イイ色だなぁと思った。これを地上に引き上げてみんなに見せたいと思った。
皆はこれをどう感じるのだろうか。この作品は、普段は目に見えない都市の水の流れを、ギャラリー内で可視化したものだ。ポンプでギャラリーに汲み上げられた水は一定の量を超えると一気に放出される。目の前を通過した水は再び排水槽へと流れていく。
会場の平面作品は、その湧水から泥を抽出し、今の街の写真の上に泥でドローイングをしたものだ。
今と昔、地上と地下、日常と非日常が画面の上で重なる。今も渋谷の駅前で行われている大きな工事は、これからの未来を今まさに造っているのに、同時に大昔の遺跡の様にも見えて不思議だ。
もしもといつものあいだに渋色の山がそびえる。



えらばなかった道（**2021**）

海の上で風に揺れる文字。たまに絡まる。しばらく待っているとほどける、時もある。
熱海で**3**代続く老舗ホテル、ニューアカオ。
崖に喰らいつくように建てられた独特の建築と、豪華絢爛な内装。プライベートビーチに温泉、山丸ごとのガーデンと、とにかくものすごいホテルだ。
その初代社長、赤尾蔵之助氏が定めた社訓が「人の選ばない道を進む」というもので、講演会記録を調べると、これはアメリカの詩人、ロバート・フロストの「**The road not taken**」という詩から引用されたものだった。
お～～～～～人の選ばない道を選んで頑張ってきたのだな～～～と温泉に入りながらぼんやり海を眺めた。
そして僕はその詩を和訳して、アカオの敷地に書写していった。

通達（**2021**）

休日の公園に一台の高所作業車。
ゆっくりと上に伸びていき、そしててっぺんで停止。
そこから大きな布をクルクルと解放する。
最近街の公園では「スケボー禁止」や「バーベキュー禁止」など、どんどんできない事が増えている。
そんな都心の公園の広場で、高所作業車から「アリに名前をつけていい」や、「石をじっくり見ていい」など、どうでもいい許可をどんどん下していった。
途中「犬に手をふっていい」と出した時に、下にいた知らない人から「犬に手**!**ふってきます〜〜〜**!**」と大きな声で言われて、実際に誰かの行動が変わった事にびっくりした。そこに何かがあるな、と感じ、そこからは語尾を「〜していい」ではなく「〜してみる」に変えた。
許可されるのではなく、見た人が自分から動くような感じでこっちから誘いかけてみる事にしたのだ。（る、終わるのがポイント**!**）
そして「てをふってみる」と出した時は、公園にいた沢山の人や、高架を走る電車の乗客までもが訳も分からないまま手を振っていた。
上手く言えないが、自分から動いてちょっとやってみるみたいな事、それが広がっていく事で、街が柔らかく開いていくんじゃないか、と予感した。

でこんなこと
いいのか

光

なぜこうなる

The Second Stage at GG #53
光岡幸一展「ぶっちぎりのゼッテー**120%**」
2023年**2**月**7**日（火）〜**3**月**18**日（土） **11:00〜19:00**
日曜•祝日休館　入場無料
主催•会場：ガーディアン•ガーデン

ステートメント
期限切れの紙のクーポン券の事が気になっている。最近はほとんど見なくなったが、今でもたまに薬局やラーメン屋のレジで半強制的に渡され、店員の目の前でレシート箱に放り込むのも何となく気が引けてしまいとりあえず持ち帰るのだが使ったためしはなく、気が付くと財布の奥底でひっそりと期限を切らしている。そうなるといよいよ機能を失った紙屑になってしまい捨てるしかなく、そうさせてしまった自分は、いつもクーポンに対して少し申し訳ない気持ちになるのだ（かといっていざレジではその存在を忘れるのだが）。そこでクーポンと何かできないかと考えた。とりあえず家中の紙クーポンをかき集めたところ、期限が**2**年過ぎた長老クーポンに出会った。そこからそのクーポンとの協働が始まったのだ。自分はいつもこんな感じで気になったモノと、自分なりの関わり方を探っていくうちに、たまにそれが作品になったりもしている。その相手は人であったり、植物や風や石、あとは歴史や風景などいろいろだ。そして今回の展示にこのクーポンは関係ないのであしからず。（光岡幸一）

展示写真：黑田菜月

展覧会レビュー
『太陽が輝くゼッテー**120%**の洞窟』

真冬の銀座の雑踏を抜け、**60**年代に建てられたビルの地下へと降りる。一見、ギャラリーが本当にあるのか不安になるが、扉をくぐるとそこには矩形の空間が広がっている。「ぶっちぎりのゼッテー**120%**」と題された光岡幸一の個展。何が「ぶっちぎりの」「ゼッテー」「**120%**」なのか、果たしてそのやる気を受けとめきれるのか、ドキドキしながら目を泳がせる。

今回、ギャラリー空間は仮設壁によって**2**つに分けられている。入口に近い空間は、静かに白く照らし出され、**A4**サイズのほとんどの部分をくり抜かれたことで、まるでフレームのようになった特徴的な赤いチラシ（牧寿次郎デザイン）が作品に用いられている。「ぶっちぎりのゼッテー**120%**」の力で、既存の壁が破られているのだろうか**?**被写体が土を掘っている写真は切り取られ、さらに風景もフレーミングされている。チラシが積まれた展示台もまた、破れたかたちに合わせて穴があけられ、敷かれたガラスの板によって周囲を反射する水鏡のようになっている。チラシに手を伸ばせば、もしくは覗き込んだりしたら——誰しもが無意識のうちに、切断された世界に取り込まれる。

仮設壁には、人ひとり通れるくらいの長細い穴があけられており、身をかがめて奥に続く空間へと促される。奥では、少し薄暗いなかで**10**個のモニターとプロジェクションによるスクリーンがこちらを向いている。映像は、まちでふと目につくような風にはためくレシートや紙、ビニール袋、旗、空になったペットボトル、小型家電回収ボックスの蓋、坂道で転がり落ちる石や植木鉢、そして空き缶を至近距離でとらえている。たまに川面のゆらめきがコンクリートに反射して光の波紋が描かれる様子や、プラットフォームに入る電車が太陽を照り返し、その光がまるで生きているように動く様も挿入される。
耳を澄ますまでもなく、風や重力を全身に受けながら彼／彼女／それらは何かをしゃべっていることが分かる。それぞれが発する音が響き合い、ハモっている。「なんだと思いますかー**?**しゃべる生き物ってなんだ、なんだろう」「おんなのこのね、確かになー、確かにそれでしかない、確かに、確かに」「レシートです、東北からやってきた」「フゥー**!**」「イェーイ」…たまに口ずさまれるメロディーは、民謡のようでもある。

大きなビーズクッションに腰を沈めていると、左右違う色の靴下をはいた光岡がおもむろにやってきて、天井から吊るされたロープにぶら下がり、壁に設置されたキックペダルを蹴らんと勢いをつけ始める。影が映る。バス•ドラムではなく、壁がキックされてエフェクターで増幅され、機械的になった音がドーンと空間に広がる。光岡は振り子の原理によって、自分が出した力で振られ、よろめきながらロープを離す。上部に設置された水面が揺らいで、壁面に波紋を落とし、口琴のような音が轟く。
間髪入れずに光岡は、線の集合がステンシルによって抜き出され、ところどころひらがなとして認識できるかたちや、手が象られた鏡が両面につけられたパネルを、全身を使ってグルグル回しはじめる。まるで破裂するようなバシャバシャという音が鳴る。手を離しても吊られたパネルは動き続け、鏡が反射して描かれたかたちは壁面を走り続ける。光岡は、パネルから身を離すと、後方の非常口を開けて出ていってしまった。
奥の空間ではこれらの動き全てが、ほぼ同時に繰り返される。そして光岡は何度も出て来て、同じ動きを黙々と反復する。もちろん、筆者は小一時間いたところで全てを見切れていないし、かろうじて目の端に映っていたとしても、とても文章では追いつかない。

いったいここは、どこなのだろうか。壁面に浮かび上がる形象、特に目立つ手形が、旧石器時代の洞窟壁画を思わせる。クロマニョン人たちは、自分の環世界にいる大型の野生動物だけでなく抽象模様も描き、ごつごつとした岩肌に手をついて、その周りに鉱物からできた塗料を吹き付け、ネガとしての手形を残した。真っ暗な洞窟の奥で、それらは松明の灯りに照らされて、蠢いただろう。確かに穴から入ったし、洞窟のようでもある。
だが不思議と洞窟＝胎内のように感じられないのは、空調の効いたギャラリー空間で湿度やにおいが排除されているからだろうか。壁がスクリーンのようにフラットで、非常口のランプが煌々と展示空間を照らしているからだろうか。おそらく、建物の構造体をジャングルジムのように転用して、壁を蹴破ろうとする（蹴破れない）ないしは揺らし、壁で仕切られた（与えられた）空間のドアを開けて外と行き来する光岡のパフォーマンスと、都市のあらゆるところで断片的に採取された「しゃべる生き物」たちがギャラリー内に取り込まれ、等しく一体として存在しているからなのではないか。そして、本展を体験した者たちもまた、ここを出て地上へと戻ったのなら、おそらく「しゃべる生き物」たちを目に追わずにはいられない。

普段からまちの片隅で「しゃべる生き物」たちに出会う度、光岡は都度カメラを回すという。彼／彼女／それらが、風や重力など自然のコントロールできない力に翻弄されているのを見つける度に。光岡はそれらの動きに合わせてアテレコし、「フゥー**!**」「イェーイ」といった叫びに似た声をあげる。確かに抗えない力によって動く手近な物体を見つめていると、生じる音も相まって、声を持つように思えてくる。その動きは、何かのメッセージや物語をまなざす者に憑依させて、それまで失われていた世界をバラバラに露呈させはじめる。確かにこの石は縄文時代から存在し、もしかしたらその時のことを覚えているのかもしれないのだが。
しかしそれらの「つぶやき」自体には因果が含まれておらず、断片的なナラティブそのものからは、あまり意味が感じられない。過剰なまでに意味を求め、言葉によって世界を分節化して把握しようとする我々にとっては（だから人間になったのだろうが）つらいことだ。しかしこの非意味的な切り取り方こそが、光岡のリアリティなのであり、我々が実感をもって認識し得る世界、その起源へとつながる鍵のようにも思えてくる。

湧き出る感情や身体の動きが、たまたま歌になった。動きの痕跡で線を描き、たまたま絵や文字になった。たまたま石や木に意思を感じて、畏れを抱くようになった——ホモ•ルーデンスのように、我々は何かの目的のために手段や知識を積み上げて来たのではなく、面白いと感じて熱中した「遊び」によって、常に身体の経験を通して世界を認識し直し、生きながらえてきた。
しかし現代に生きる私たちは、もはや「遊び」だけでは生きられない。芸術もまた、膨大な時間の労働と道具の使用に結びついている。実際に光岡は、この展覧会期中はギャラリーに常駐し、パフォーマンスをし続けるのだという。意図的に限りなく作業を反復する極めて人間的な行為の中で、スーフィズムのように自他との合一を目指すのだろうか。いやそれは、有用性に支配されている世界への抗議のようでもあり、旧石器時代に洞窟壁画を描いたクロマニョン人たちが、本気で「私たち」であることを確認するための作業のように思えてならない。

実は「ぶっちぎりのゼッテー**120%**」は、光岡がバイト先の倉庫整理を行う中で偶然目にした言葉だという。洞窟の中から切り取られた誰かの言葉。場所から立ち上がったある人間の意思が抽出され、切断されることによって、それは分裂しながらも、太陽そのものに照らし出され続けるものとなった。

慶野結香（キュレーター）
1989年生まれ、神奈川県出身。秋田公立美術大学、サモア国立博物館での勤務を経て、**2019**年から青森公立大学国際芸術センター青森［**ACAC**］学芸員。**SIDE CORE/EVERYDAY HOLIDAY SQUAD**個展「**under pressure**」（**2021**年）などの企画を担当。

ガーディアン•ガーデンは、**1990**年のオープン以来、若手クリエイターに表現する「機会」と「場所」を提供しようと、公募展を中心に活動を展開しています。「**The Second Stage at GG**」シリーズは、ガーディアン•ガーデンで開催する公募展の入選者たちの、その後の活躍を紹介する展覧会です。